

農	す	見	を	幸
業	る	え		せ
ビ		る		
ジ		化		
ネ				
ス	V	O	L	20

学校に行ってみよう！

今年の4月から九州大学の大学院に通っている。専攻は農業資源経済学・農業経営学。鹿児島から福岡のキャンパスに通学している。入学試験では、試験官の教授陣からは、「学費は払えるか？ 受かったら、ちゃんと通学するか？」と念押しされた。こっちは大真面目だ。目下のところ、興味のあるキーワードは、「IT（情報）」、「経営」、「人材育成」である。農業の実業の世界で、実践を積み重ねてきた私が、研究の世界に足を踏み入れたのはワケがある。ある日、「はやく学校にいかなきゃ。遅刻する！」と夢に見たことがあった。年甲斐もない笑い話のようだが、潜在意識の中では、学校の存在がずっと気になっていたらしい。

「自分の思考の枠組みをどれだけ広げられるか」これがここ数年來、私のなかで最大のテーマだ。この広がりこそが、自分のあり方、ものな考え方、行動を規定する計り知れな

い力を持っているからだ。人生そのもの、と言ってもいい。もう一つのテーマは「巨人の肩の上に乗る」だ。人類が積み重ねてきた知恵、知識、経験をしつかり踏まえて、次世代に向けて自分が何をすべきか見据えさせてくれる言葉だ。

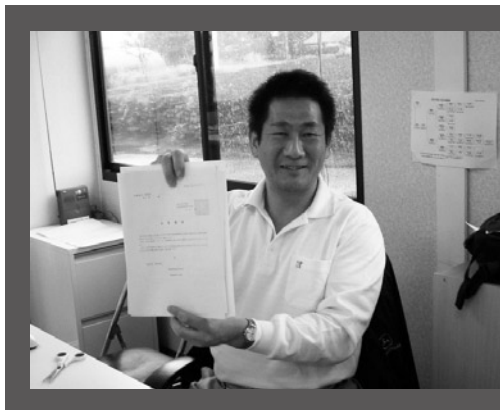
学校に通うようになった経緯は、2つのテーマを熟成させた結果、次の問題意識に達したのだ。「農業界で実践してきたことを今の最前線に位置する研究と融合させることで、世の中にもっと役に立つことができるとはできないか」。抽象的な話だが、心底そう思っている。さらに、大学に通えば、論文や研究成果を成文化する中で、頭の中の思考や構想を伝える訓練ができるという狙いもある。

✓農業を言語化する意味

経営学という学問は、企業経営に

関わる経済的・人間的・技術的側面が研究対象だ。つまり、産業界で成功を収めている経営者の事例の記録である。とすると、誰かお手本になる人がいないと、記録作業も研究も進まない。新しい発明や発見は、研究者が先に行なう方が多いが、この分野では、研究者が経営者の先を行くことはない。一方、農業の研究に抱いていたイメージは、ひとことで言えば、技術だ。品種の改良であったり、農薬の使い方であったり、農法であったり、現場との接点は、技術交流くらいだった。それは、農業の研究が現実とかけ離れているからだと言わざるを得なかった。待つていても、なかなか状況は変わらない。

それよりも、われわれ農業の実践者サイドからできることは、研究サイドに歩み寄り、もっとお互いを高め合う対等な関係になることだ。既定の枠を変えるためには、そのくらい



2月末に、修士課程の「合格通知」が届いた。20数年振りに、合否連絡を待つドキドキした日々を過ぎたので、非常に嬉しい報告だった。

具体例をあげよう。私の研究は、「個人経営から組織経営を進める」として、効率的な経営と新規就農者への体系的な技術ノウハウ伝達が可能になる」という仮説を証明することだ。その目的は、「農業の発展を指し、ITを導入することで、農業界と農業経営に関わる課題を解決することだ。我われ農業経営者にとつては、日々実践していることで、言わば、**「当たり前」の活動に過ぎ**



南さかうえ代表取締役。1968年鹿児島県生まれ。24歳で就農。コンビニおでん用ダイコンの契約栽培拡大を通して、98年から生産工程・投資・予算管理の「見える化」に着手。これを進化させたIT活用による工程管理システム開発に数千万円単位で投資し続けている。現在、150haの作付面積で、青汁用ケール、ポテトチップ用ジャガイモ、焼耐用サツマイモなどを生産、提携メーカーへ全量出荷する。「契約数量・品質・納期は完全100%遵守」がポリシー。03年、500馬力のコーンハーベスタ購入に自己資金3000万円を投下し、トウモロコシ事業に参入。コーンサイレーズ製造販売とデントコーン受託生産管理を組み合わせた畜産ソリューションを日本で初めて事業化。売上高1億6000万円。08年から食品加工事業に進出。剣道7段。

坂上隆
Takashi Sakau

ない。だが、研究サイドからみれば違う。その仮説が本当に可能になる裏付けは何か、が重要なのだ。

実際に大学の授業では、腑に落ちることと、古めかしく思うことがある。前者は一般の経済原理に則った内容だから素直に受け止めているが、後者は教科書に書かれている「記録」よりも、我われ農業経営者の方が進んでいると感じるのだ。自らの実践で培った技術や経営の進歩、その枠組みを世の中に通じる形で言語化する意義を認識できた。農業経営者は実践で得た実際の情報を与えて、研究者は最新の研究成果を与える。私は、はじめから、その点で、

研究サイドと対等な姿勢で取り組みたい。

✓研究者と農業の未来を照らす

学校に入ってみて、一世代若い学生達と話すと、発見がいろいろある。ある学生は、「農業参入が成功するには、行政がどんな支援をすべきか」をテーマにしている。なるほど、そう理解しているか。やはり世の中の農業への問題意識が研究の世界に反映される。そんなことは農業の日々の商売にあまり影響しないのではないか、と思われるかもしれないが、でもない。

世界中で実践的な農業研究がどんどん進んでいる。実用化まで時間がかかるかもしれないが、その「知の巨人」の恩恵を活用し、現場でまず活用できるのは、その国の農業者だ。日本の農業研究が世界の最前線にしなければ、日本農業の将来成長にとっては、知の停滞を意味する。知の最前線である大学が農業研究の新たな成果を農業界とともに、発信することは、他国との競争を考えれば、十分に脅威になりうるのだ。

将来展望のある産業には、どんな若くて優秀な人材が入ってくる。一生をかけて研究や就職を望むだけの魅力を提供するためには、まず、

我われが到達した農業のレベルを正確に世に伝える努力をする。そして、農業にどのような可能性があるのかを体系的に訴える力を農業界が培うことが重要だ。これらの積み重ねで、研究サイドと対等にコミュニケーションできるようになり、あるべき実践と研究の融合が生まれてくると素直に感じている。

研究サイドからの誘いを待つのではなく、「私が大学へ行く」と決めて、入学試験を受けた。許可したのは向こうだから、有難いことに大事な接点をお互いに持てたのだ。研究者と一緒にイノベーションを実際に経験してみたいかがだろうか。